実物に触れる出前授業

～実感・体感して得られる歴史の魅力～

調査課　柳坪　武志

考古学コラム「きずな」NO.23
令和３年１月 20 日
岐阜県文化財保護センター

〈はじめに〉

岐阜県文化財保護センター（以下、「当センター」という。）の調査課には、史学を専門とする職員と公立学校から異動してきた職員がいます（私は後者です）。当センターの業務の１つに学校などで行う「出前授業」があります。普及活用事業の一環として、当センターの発掘調査で出土し、保管している土器や石器などの遺物を使って授業を行うものです。今回は、私が出前授業を行って感じたことをお伝えします。

〈実物のもつ力〉

私が小学６年生の社会科の歴史の授業を行った際、「縄目の文様がある縄文土器」といった教科書の文章だけでは児童の実感がもちにくいのではと思い、教材室にあった、地域から出土した縄文土器の破片を使って授業を行いました。しかし、細かな破片だったためか期待したより児童の興味は高まりませんでした。

その数年後、当センターに異動になりました。４月早々、小学校での出前授業に地域から出土した遺物を持って行きました。完形土器を目の前にした子ども達の反応は、想像を超えるものでした。「実物ですか？」「本当に触っていいんですか？」と子どもたちは興味津々でした。授業内容は４種類の土器・陶磁器（縄文土器、弥生土器、須恵器、灰釉陶器）を比較して古い順に並べ替えるものでした。子ども達は集中して手元の遺物を観察して、縄文土器には様々に施された文様があること、弥生土器は縄文土器に比べて文様が少なく薄いこと、須恵器は灰色で固く焼かれていること、灰釉陶器はツヤがあることなどによく気づき、次々と意見を発表しました。授業を進める中で、私は実物の遺物がもつ力を強く感じました。そして、教科書から得た知識と、実物の土器に触れる体験が合わさって、実感を伴った学びとなったと感じました。

完形土器に触れる子ども達

発表の場面

〈歴史を感じる〉

出土遺物は地域の歴史を考える上で大変貴重な資料です。どの時代、どこに、どんな人々の営みがあったのか、交易、流通、政治、文化など地域の歴史が発掘調査によって更新されます。教科書には各時代の政治の中心に沿って記述がされていますが、身近な郷土の歴史を知ると、歴史の見方が変わり、一層興味が高まるのではないかと思います。

出前授業の終わりには、学校周辺の遺跡が載った遺跡地図を提示します。「学校のグラウンドに遺跡がある！」「自分の家の近くにもある！」という元気な声が聞かれます。

授業後にも、遺物の周りに集まり、色々な話、質問をする子ども達を見ていると、興味・関心が高まって歴史をより身近に感じているのだと嬉しくなります。そして、出前授業の意義を感じます。

〈子ども達の感想より〉

- 土器のことを詳しく知ることができたし、実物に触ることができて嬉しかったです。
- 何千年も前の縄文土器が残っていることが凄いと思ったし、すごく貴重な体験ができました。
- 歴史があまり好きじゃなかったけど、少しだけ好きになりました。

〈授業の改善〉

出前授業には複数の職員で行く場合もあります。その際は、互いの強みを活かして役割分担して授業を進めています。授業の進め方、子ども達への言葉かけ、興味を高める話、専門知識で質問に答えることなど、互いに学ぶことが多くあり、以後の出前授業に活かしています。

出前授業は、授業のシナリオである指導案をもとに行っていますが、授業後に学校から頂くアンケートや職員が授業を行って感じたことを調査課の職員全員で交流して、毎年、内容の改善を行っています。

〈おわりに〉

出前授業は、小学校以外にも中学校、高校、大学などに出向いています。ご希望される方は、当センターホームページをご覧ください。

アドレス https://www.pref.gifu.lg.jp/page/13347.html